# 「2011 年春学期にほんごわせだの森」における SNS[1]の活用事例

奥山 寛

## １．はじめに

「2011 年春学期にほんごわせだの森」（以下、「11 春森」）は 2011 年６月から現在（８月４日時点）までに、８回の活動が水曜日と土曜日に隔週で行われている。履修生は、筆者を含めた院生４名である 教室の設計・運営にあたっては、週１コマの授業時間内でのミーティング以外に平均して週２日、５コマ程度の履修生による自主ミーティングが行われた。

## ２．「11 春森」への SNS 導入の背景

本章では「11 春森」になぜ SNS を導入したのか、導入に至った背景について説明する。「11 春森」の前期にあたる「2010 年秋学期にほんごわせだの森」においても SNS は導入されていたが、活用されていた SNS はブログのみであり、また、その活用方法は活動内容の発信と、次回の活動日の告知に限定されていた。[2] そうした SNS の活用方法に見られる問題として、ブログの記事が実際にどのような人たちに読まれているのかはっきりしない、という点が挙げられる。ブログの機能として備わっているアクセス解析を使っても、どんな人がブログの記事を読んでくれているのかは、読者から書き込みがなければ管理者の側から把握できないのである。また、前期の「にほんごわせだの森」では SNS の管理者がブログに書き込みをしても、書き込みに対する読者からの書き込みがほとんど行われていなかった。より具体的に述べると、2010 年秋学期の「にほんごわせだの森」の活動期間中に履修生によって投稿されたブログの記事数は 67 であった。だが、そのうち、読者からのコメントがついた記事はわずか４つだけであり、しかもそのうち３つは前期の「にほんごわせだの森」の活動にボランティア参加していた日研生１人によるものであった。

このように、前期のブログにおける情報発信にはその情報の受け手であるはずの読者の顔が見えにくく、ブログ記事に対する読者からの書き込みもほとんど得られていないという問題が見られた。そこで筆者は、前期よりも SNS 活用の幅を広げ、更にその活用方法を工夫することで、こうした問題が解決でき、同時に以下のことが可能になるのではないかと考えた。

（１） 活動について多くの人に知ってもらえる

---

[1] ソーシャル・ネットワーキング・サービス。

[2] アメーバブログ http://ameblo.jp/2010au-mori-jissen/ なお、ブログの更新は 2011 年８月４日現在も「11 春森」の履修生によって継続されている。

（２）　活動の参加者が増える
（３）　活動の参加者との双方向の交流がより親密になる
（４）　教室に来られなくても活動に参加できる

まず、１と２についてであるが、私用するSNSの数を増やせば、それだけで情報発信量が増える。その結果として、多くの人に活動のことを知ってもらえて、活動の参加者もそれに付随するように増加するのではないだろうか、と考えた。次に３であるが、いくら情報発信量が増えても、それが相手の顔の見えない一方通行的なものであっては前期までの問題点が解決できない。それならば、ブログとは異なる実名主義の理念に基づくSNS、例えばfacebookを活用することで、相手の顔の見える情報発信と双方向的な交流が可能になるのではないだろうか、と思われた。最後に４については、Ustreamなどによるストリーミング放送をSNSと連動させることによって、教室外からの活動への参加を可能にし、それによって、１～３の実現可能性がより高まるのではないだろうか、と考えた。 以上のような考えに基づき、「11春森」におけるSNS導入は始められた。

## ３．SNS活用の概要

「11春森」におけるSNS活用の概要は以下の通りである。

### ３．１　SNS活用の目的

（１）　活動について多くの人に知ってもらう
（２）　活動の参加者を増やす
（３）　教室にいなくても活動に参加できるようにする
（４）　活動の参加者との活動前、活動後の交流をより活発にする

### ３．２　使用したSNS

（１）　アメーバブログ
（２）　twitter
（３）　facebook
（４）　Ustream
（５）　Scriblink

### ３．３　SNSの活用方法

（１）　活動内容の情報発信
（２）　活動日の告知
（３）　活動前、活動後の参加者との交流

（４）　教室外からの活動への参加

## ４．考察

本章では「11 春森」の SNS 活用について、その成果および限界という観点から考察を加える。まず、成果があったと考えられる事例について述べる。

**〈成果があったと考えられる事例〉**
**１　活動を多くの人に知ってもらえた**
**例）facebook ページの fun 登録者数　0⇒36（2011 年８月４日現在）**
**２　活動の参加者が増えた**
**例）facebook で活動の存在を知ったのをきっかけに、山梨から参加しに来てくれた**
**３　教室にいなくても活動に参加できた**
**例１）Ustream で教室外から活動を見たり聞いたりできた**
**例２）Scriblink で参加者がオーストラリアから「11 春森」の活動に参加できた**

まず、活動を多くの人に知ってもらえたかという点については、facebook ページの fun 登録者数がページ開設時の０人から 36 人に増えた、という一定の成果が得られた。もちろん、36 人というのは人数として決して多くはない数字である。だが、ブログのアクセス履歴とは異なり、facebook ページの fun 登録機能は管理者が fun 登録をしてくれた人を特定する形で把握ができ、 活動の情報発信を fun 登録後は継続的に受け取ってもらえるという利点がある。すなわち、前期までの相手の顔の見えない情報発信とは質的に異なり、相手がどのような人かある程度知った上で情報発信ができるようになったという点で進歩があったと言えるだろう。次に、活動の参加者が増えたか、という点についてであるが、 活動参加者の中に、facebook を通じて「11 春森」の存在を知ったことをきっかけに、わざわざ山梨から参加しに来てくれた参加者がいた。その参加者はもともと、ある日研生（「11 春森」にはボランティアとして数回参加している）と facebook 上でのつながりがあり、その日研生の個人ページの wall に表示された「11 春森」の活動日の告知を読んだことから活動に興味を持ったのだという。これは人と人が実名でつながるという facebook の特徴がうまく活かされた事例であると言えるだろう。また、教室にいなくても活動に参加できるか、という点に関しては、Ustereamや Scriblink を活用することによって、それが実現可能であるということが確かめられた。

次に、SNS 活用の成果が十分には認められなかった事例について述べる。まず、SNS 活用の目的の４として挙げた「活動の参加者との活動前、活動後の交流をより活発にする」については、参加者からの SNS への書き込みが少なく、期待したような成果が得られなかった。また、Ustream、Scriblink を用いた教室外からの活動参加に関しては、技術的に実現可能であり、実際に行ってみて教室活動の可能性を広げるという意味では確かに興味深い

面はあったものの、通信技術の水準や通信機器の性能面で解決すべき課題が多いと感じられた。

SNS 管理者の１人として今回の実践を行った筆者の全体的な印象としては、SNS の管理がルーチンワークになり、精神的に疲弊しやすいという問題点が強く感じられた。例えば、参加者からの SNS への書き込みを増やそうと考えるならば、SNS の管理者側からの書き込みを意識的に増やしていく必要がある。その際に単なる活動日の告知のような無味乾燥なものではなく、参加者の興味を惹き、思わずコメントしたくなるような書き込みができればより望ましい。だが、SNS の管理を１ヶ月、２ヶ月と続けているうちに、そうした書き込みをしようと努力すること自体が筆者には心理的な負担に感じられるようになってしまった。その原因には、もちろん SNS の管理に対する性格上の向き不向きといった問題もあるだろうが、それよりも根本的に、何の為に SNS を管理するのか、その目的意識を持ち続けることの困難さがあるように感じられた。事実、「11 春森」の SNS 活用の目的として掲げた「活動について多くの人に知ってもらう」、「活動の参加者を増やす」、「活動の参加者との活動前、活動後の交流をより活発にする」といった目的には明確な到達目標が設定されていなかった。そのため、活動を続けていくうちに教室実践における SNS 活用の目的が次第に曖昧になり、その結果として、SNS の管理が単なるルーチンワークと感じられるようになってしまったのではないだろうか。

最後に「11 春森」における SNS の活用から垣間見えた、日本語教育の教室実践に SNS を活用することの限界について述べる。それは、SNS の活用をいくら工夫しても、それだけで教室実践が素晴らしいものに変わるわけではなく、SNS ができるのは結局のところ教室実践のサポートに過ぎない、ということである。いくら SNS の管理者が活動内容の情報発信や活動参加者との SNS 上での交流に労力をつぎ込んだとしても、教室実践の内容が参加者にとって興味のあるものでなければ SNS の活用によって期待される成果を継続的に教室実践に還元することは難しいだろう。ようするに、教室実践の中身が第一であり、しっかりとした教室実践の内容なり理念なりがあってこその SNS の活用である、ということである。

## ５．今後の課題

「にほんごわせだの森」における SNS 活用の今後の課題として、以下の２点を挙げたい。第一に、日本語以外の言語で情報発信をしたり、日本語学習者の母国で高いシェアを占める SNS による情報発信を行ったりすることである。「11 春森」では、情報発信は基本的に日本語で行い、活用した SNS も日本国内で利用者の多いものを選んだ[3]。だが、その結果として日本語を学び始めたばかりの初級の学習者や、母国で高いシェアを占める SNS しか使用していない学習者にこちらの情報発信が届かないという問題点があった。もちろん、こ

[3] 日本国内で利用者の多い SNS として mixi が挙げられるが、今回の実践では時間的な都合上、活用できなかった。

れらを実現するためには、履修生の中に日本語以外の言語が堪能な者がいる必要があるだろうが、そうでない場合でも、例えば日研生の中からボランティアを募るといった方法で実現は可能だろう。第二に、SNS の管理に伴う精神的疲弊への対策であるが、これには SNS を万能のツールとして捉えるのではなく、その成果がどの程度期待できるかを知った上で、あくまで SNS を教室実践のサポートとして活用する姿勢が大切だろう。すなわち、利用する SNS の数を制限する、SNS を活用する目的として明確な到達目標を設定する、履修生が複数いる場合は SNS の管理を役割分担して行う、などといった工夫が、SNS の管理に伴う精神的疲弊への対策として考えられるだろう。